

自我親和的なこだわりと自我異質的なこだわり

福島医大看護学部教授 志賀 令明

人間はなにかにこだわりを持つものである。できれば分かりやすい原稿を書きたいと思いつつながら原稿を書くのもごく軽いこだわりである。しかし世の中には過剰なこだわりを示す人もいる。たとえば、外出するとき玄関の鍵を閉めたか不安になって何度も確認したり、アイロンの線を抜いたか気になって勤め先から家に戻ってしまうなどもそれに該当する。このようなこだわりは、頭では「大丈夫なはずだ」と分かっているにもかかわらずどう衝動性に無理矢理突き動かされてしまうもので、必ずしも自分の意志とは一致しないために「自我異質的なこだわり」と呼ばれる。これが病的なものになると「分かっているのにどうしても手を洗わないではいけない」「やめなければいけないと思いつつながら頭の毛をどんどん抜いてしまう」などの症状を示し、これらは総合して「強迫性障害」と呼ばれる。

他方、たとえばあたかも自分が駅員であるかのように、電車のホームで「駆け込み乗車は危険ですからおやめくださーい」と叫び続ける青年の行動は、彼自身なんの違和感も感じていないと判断されるために「自我親和的なこだわり」と呼ばれる。

強迫性障害は背後に何らかの不安を潜在させており、その不安に直面しないための防衛として強迫行動ないしは強迫思考が出現すると考えられている。これに対して、自我親和的なこだわりは持って生まれてきた素因に影響が強いようである。緊張病的なこだわり、自閉症の常同行為、アスペルガー症候群での執着などがそれに該当する。

したがって、受けた電話で「こだわり」を強く感じたら、それが自我親和的なのか異質的なのかに注意を向けながら聞くことも大事である。「どうしても～しないわけにはいかないんです」と言われたらおそらく不安が潜在すると考え、「なにか居心地の悪い辛い感じがあるのですね」と応えればよいし、頻回通話者がこちらの感情におかまいなく一方的なこだわりを示したならば、背後に精神疾患や発達障害を想定した方がよい。もしそれがかわいそうだと感じる受け手であれば「耳を傾け」ればよいし、手に負えないと感じたならば専門医の紹介をするのがよい。ただ理解しておいたほうがよいのは、精神疾患といってもいつでも「狂って」いるわけではないということである。適切に聴くことが出来れば、つかの間の正常が訪れることもある。自分の聴く技量に応じて聴けば「いのちの電話」の使命は果たされると考えている。